

遊星植民説

海野十三

青空文庫

「編集長、ではもう外うかがに伺うかがつてゆくことは御座いませんネ」

「まあそんなところだね。とにかく相手は学界でも特に有名な変かわり者ものなんだから、君の美貌びぼうと、例のサービスとを武器として、なんとか記事にしてきて貰もらいたい。その成績によつては、君の常つねづ々ね欲しいと云つておつたロードスターを購かつてやらんものでもない」

「アラ、きつと御約束しましたワ。ロードスターを買つて下されば、あの人との結婚式を半年も早めることができるんですの、まあ嬉しい」

「嬉しいがるのは後にして、一刻も早くぶつかつて来給え。はい、

円えんタク代が五十銭！」

* * *

「ゴーゴンゾラ博士の研究室は何階ですの」

「第三十八階！」

「そこまで、やって頂ちようだい戴だい」

「はい、上へ参ります。御用の階数を早く仰おっしや有あつて下さいまし、

二階御用の方はございませんか。化粧品靴鞆ネクタイ御座います。

三階木綿類もめんるい御座います。お降りございませんか。次は四階絹きぬ

織物りもの銘めい仙羽せんは二重御座います。五階食堂しょくどうでございます。ええ、六

階、七階、あとは終点まで急行で御座います。途中お降りおの方は

御乗換おのりかえをねがいます。ありませんか。では三十八階でございます

す。どなたもこれまでで御座います。お忘れもののないように、
毎度ありがとうございます」

「まあ、ここは屋上。博士の研究室なんてありやしないわ。あら、
あすこにネーム・プレートが下っている。まるで、エツフェル塔
の天^{てつ}辺^{ぺん}に鵠^{こう}が巢^{のとり}をかけたようね。では、下界^{げかい}で待っているあの
人のために、第二にはロードスターのために、第三は原稿料のた
めに、第四は編集長のために、勇気を出して、この鉄梯子^{てつぼしご}に掴^{つか}
まって登りましょう。誰も、梯子の下に、タカリやしないでしょ
うね。エツサ、エツサ、エツサ、エツサラエツサ」

カンカんと、ノツクの音。

「ゴーゴンゾラ博士！」

「……」

「ゴーゴンゾラ博士つたらサ！ ご返辞へんじなさらないと、ペンチでこうあつでんげんせん高圧電源線せんを切断きつてしまいますよ、アリヤ、リヤ、リヤ、リヤ、リヤ……」

「これ、乱暴なことをするのは、何処どこの何奴どいつじゃ」

「博士ね、ここに紹介状を持って参りましたワ」

「おお、なんと貴女あなたは、美女であることよ！ 紹介状なんか見なくとも宜よろしい。さあ、早く入った、入った」

「オヤオヤ、あたしのイツトが、それほど偉大なる攻撃力があるとは、今の今まで知らなかった。では、御免遊ごめんばせ。まア博士せんせいの研究室の此の異様いようなる感覚は、どうでしょう！ まるでユーク

リッドの立体幾何室を培養ばいようし、それにクロム鍍金めつきを被せたよう
ですワ。博士せんせい、宇宙はユークリッドで解とけると御考えですか」

「近ければ解け、遠ければ解けぬサ」

「博士せんせいの御近業ごきんぎようは、一体どのくらい遠くまでを、問題になさ
つています」

「近業とは？」

「判つっているじゃありませんの。謂いうだけ野暮やぼの『遊星植民ゆうせいしょくみん
説』！」

「ははア、そんなことで来なすったか。だが遊星植民には、欠か
べからざる必要条件が一つあるのを御存じかな」

「存じませんワ、博士。それは、どんなことですか」

「いや、段々と判^{わか}つて来ることじやろう」

「それでは、そのことは後^{あとまわ}廻しとして、博士。遊星植民説の生れた理由は？」

「とかく浮世^{うきよ}は狭いもの——ソレじや」

「満洲国があつても、狭いと仰^{おっしや}有るの」

「人間の数が殖^ふえて、この地球の上には載^のりきらないのも一つじや。だが、それだけではない。人間の漂^{ひよう}泊^{はく}性^{せい}じや。人間の獵^り奇^き趣味^{しゆみ}じや。満員電車を止^やめて二三台あとの空^すいた車に載^のりた

いと思う心じや。わかるかな。それが人間を、地球以外の遊星へ植民を計画させる」

「まあ。必要よりも慾望で、遊星植民が行われると、おっしやる

のネ」

「そうじゃ。能力さえあるなら、人間はどんな慾望でも遂げたい。すべての達せられる程度の慾望が達せられると、この上は能力をまず開拓して、それによって次なる新しい慾望を覗う。慾望の無くなることは無い。科学はオール・マイティーにして、同時にオール・マイティーではない。もつと明瞭めいりように云うと、科学はレラテイヴリーにオール・マイティーであるが、アブソリュートリーにオール・マイティーではない。初等数学で現わすと、『オールマイティーじゃ』と云つて誤りでない」

「どうも、あたしには哲学が判りませんのよ」

「高等数学だから判らんのじゃよ」

「そんなことより、遊星植民の実際はどうするんです？」

「いろんな方法があつて、一々述^のべきれないが、素^{しろうと}人に判りよい方法を三つ四つ、数えてみよう。まずお月様を征服することじや」

「まあ！」

「ロケットという砲弾みたいな形の、篋^{べらぼう}棒に速い航空機に、テレヴィジョン送影^{そうえいそうち}装置を積んで月の周囲を盛んに飛行させ、月の表面の様子を地球の上のテレヴィジョン受影機にうつして、地理を研究する。これは月以外の、どの遊星へ植民するときも同じ手じや」

「偵察飛行みたいだワ」

「そうして、上陸地点を決定し、又上陸後はどのような方法で、地球の人間が衣食住をすべきかを計画する。計画が出来たら、地球の上から、人間がロケットに乗って飛び出し、兼ねて探して置いた地点に上陸する」

「随分日数がかかるでしょうネ」

「まあ一週間で行けるようになる」

「それからどうなりますの」

「第一に大切なことは、エネルギーを得ることだ。これは太陽から来る放射熱を掴まえて、発電所を作る。そのエネルギーで、温めたり、明るくしたり、物を製造したりする。段々と品物は大きくなり、臆て月世界は、この大発電所だらけになって、温かく

なり、水蒸気も水も出来、空気も地表に漂い^{ただよ}はじめるだろうし、果ては地球と全く同じ状態になる」

「なるほど、うまく行きそうですのネ」

「地球が古くなると、もっと太陽に近い他の遊星、たとえば金星などへ移住を開始する。場合によると、この地球も、金星のそばへ、一緒に持つていってもいい」

「そんなことが出来ますの」

「出来るとも、^{いんりよくうちけしき}引力打消器を完成すればよい。ピエゾ^{すいしよ}水晶板^{うばん}を使って、これの小さいのが出来る今日だから、明日にも大

きいのが出来て、地球自由航路が開けるかも知れない」

「地球自由航路で、なんですの」

「地球自由航路というのは、地球が同じオービットに従って太陽の周囲を公転しなくてもいいことになるのだ。地球は宇宙のうちならどこへでも、ちようど恰度円タクをあやつ操るようにならう、思うところへ動いてゆけるようになるだろう」

「まあ！」

「その途中で、地球にあいそ愛想をつかした奴は、近づく他の遊星へ、どンドン移住してゆく」

「他の遊星に、また人間がいて、喰くいつきやしませんか」

「一応それは心配だ。だがわがはい吾輩の説によると、まず大丈夫と思う。第一に、地球へ他の遊星から来るでんじは電磁波を、十年この方、世界の学者が研究しているが、その中にはふごう符号らしいものが一つも

発見せられない。これは地球がどこからも呼びかけられていない証明になる。然るに、わが地球からは、今日既にヘビサイド・ケネリーの電離層を透過して、宇宙の奥深く撒きちらしている符号は日々非常に多い、短波の或るもの、それから超短波、極超短波の通信は地球内を目的としているが、地球外へも洩れている。これから考えても、地球の人類が、一番高等な生物だということが判る」

「あたしにも判りますワ」

「第二は地球の人類が他の遊星の生物から攻められたことがない点だ。人間の頭は今日、もし他の遊星へ行くんだったら、その生物を殺すつもりでいる。なのに、地球の人間の方は、まだ他の遊

星から攻められたことがない。これから見ても、この宇宙には、われわれ人間以上に発達した生物がないことが知れる。人間は、広い意味に於いて万物の霊長だと云えるのじゃ」

「まア、博士は、なんて豪い方なんでしょ」

「よいかな、お嬢さん。いまは大丈夫だ。しかし今から二万年位経ったあとでは、果して人間が宇宙に於てお職を張りとおすかどうかは疑問なのじゃ。そのころには、優秀な生物がどこかの遊星の上に出て、本格的に地球征服を実行するかも知れない」

「困ったわネ」

「そうなれば、世界戦争なんてなくなるだろう。何しろ、他の遊星からの攻撃を撃退しなければならなくなるのでね。だから、人

類は今からよろしく、有望な他の遊星へ植民しておくのがよい。そしてイザというときには、便利な空間から敵を撃退する。とにかく大宇宙が人間の手で公園のようになるのは、案外速いよ。二十万年も経てばいいだろうか。

だが此^{ここ}処で、一日でも早くこの事業に手をつけると、後に行つては千年や二千年は、早く目的を達することが出来る」

「手をつけるツてどうするんですの」

「いまでも全世界で、遊星へ飛ばすロケットを考えている学者が十五人、本当にロケットを建造したものが二人ある」

「まあ、もうそんなに進んでいるのですか。^{おどろ}駭いた、あたし」

「そんなロケットに乗ってみたいとは思わないかね」

「思いますワ、博士」

「そうかい、では此この窓から、外を覗のぞいて御覧」

「アラ、博士。パノラマが見えますワ。宇宙の一角から、フットボール位の大きさに地球を見たところが……」

「よく御覧、その地球は、見る見る小さくなってゆく！」

「ああ、恐ろしいこと。ああ、あたしは氣持が変になつた！」

「耳を澄すましてごらん。エンジンの音がきこえるだろう。ロケットの機尾きびから、瓦斯ガスを出している音もするだろう」

「では、もしや……」

「ロケットは、地球を離れること九十五万キロメートル」

「博士、冗談はよして、元の地球へ帰して下さい！」

「わしは、君のような、若くて美しい女性がこの室に入ってくれるのを待っていた」

「博士、あたしには許婚いいなすけが……」

「わしのロケットはあの第三十八階ですべての出発準備を整えていたのだ。唯、ただ欠けていたのは遊星植民に大事ないつつい一対の男女――

――男はこのわし。その相手の女さえ来てくれると、それで準備は完了したのだ。さあオリオン星座附近で、新しい遊星を見付けて降下しよう。そこでお前は、幾人もの仔こを産うむのだ。今は淋さびしいが、もう二十万年も経てば、地球位には賑にぎやかになるよ。おお、なんと愉快的旅ではないか」

「ああ、あの人。編集長め！　そして、ああ、地球よ……」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1932（昭和7）年6月号

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力・tatsuki

校正：ペガサス

ファイル作成：

2002年12月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遊星植民説

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>